

[金属工芸の美展によせて]

## 小金銅仏に託された願い — 大和文華館所蔵品から —

当館には中国・韓国・日本の貴重な小金銅仏が所蔵されており、この度の展覧会で、その全てを御覧いただくことができます。この欄ではその一部を御紹介して見たいと思います。

金銅如来坐像(図)は当館の金銅仏像中で最も古い時代の作品です。制作年は仏像の様式と台座に刻まれた銘文「庚」の字から、中国・北魏の太和年中、480年(庚申)又は490年(庚午)です。諸書で紹介されて有名になっていますが、仏像の名称についてはこれまで確定されて来ませんでした。この仏像は背面にも如来坐像が彫られています。正面の偏袒右肩(右肩を殆んど出す着衣法)像に対して、こちらは通肩(両肩を覆う着衣法)の堂々とした像で、四角張った顔に明るい表情を見せ、太和仏の臍よかな面が良く出ています。しかもこの像は、莖の付いた蓮華の上に今しも生まれ出たような描き方をされています。これら表裏二体の如来像はどちらも如来に通形の禪定印(両手を腹前に組む印相)を取っていますが、それぞれ何如来を表わしているのでしょうか?台座の銘

文には「蘇」という人が「七世父母祖父母」の為に「造尊像」とだけありまして、残念ながら如来の名前は分かりません。手がかりになるのは、北魏時代に広まった「弥勒信仰」が「西方浄土信仰」や「法華経信仰」などと複雑に錯綜し、隋唐以降に一般化した「阿弥陀信仰」とは大きく異なっていたと言う点です。即ち、釈迦・多宝の二仏並坐像(法華経信仰)を造って「西方に生天」し(西方浄土信仰)、「未来この世に下生して説法をする」という弥勒仏にま見えない(弥勒信仰)と願ったことが、多くの銘文によって分かります。そして、また、本像より後の時代になりますが、同じ北魏の孝昌3年(527)銘の龍門石窟の仏像には「釈迦仏像を造り、西方に住む無量寿仏のもとに生まれ、(中略)弥勒仏にま見えない」と刻まれています。ここには多宝仏は見えず釈迦仏像のみが挙げられています。本像は時代は早いものの、同様な「釈迦→西方生天→弥勒」の信仰を示す一例ではないかと思われまます。そして、これも「法華経信仰」「西方浄土信仰」と結びついた「弥勒信仰」を



金銅観音菩薩立像(正面) 白鳳時代



同左(側面)



同左(背面)

表わす一例です。それにおいては、現在兜率天にいる弥勒菩薩が弥勒如来として下生し(この世に出現し)、龍華樹の下で説法の三会を行う。即ち、人々は死後も、弥勒仏と共にこの世に再生する(龍華樹下三会に化生し弥勒仏の説法を聞く)ことを願ったのです。本像は従って、正面が釈迦如来、背面が弥勒如来と解釈できます。弥勒如来が花莖上の台座に坐しているのは、龍華樹の下に成道して説法の三会を開くことを象徴的に表現したとも見られ、また単に、弥勒如来の浄土におられる姿の表現であるとも考えられます。

金銅観音菩薩立像(図)は、白鳳時代に流行した童子形に造られており、頭部や手が大きいのが特徴です。

観(世)音菩薩は、阿弥陀如来の脇侍として弟分の勢至菩薩と共に、多くの菩薩の最上位にあり、衆生は一切の苦悩を除くとされるものです。その福音を得るには、簡単な一称、一念、一礼によれば良いというところから信仰の普及は絶大なものがありました。中国の南北朝の仏教から朝鮮半島を経て日本にも古くから『観無量寿(阿弥陀)経』、『法華経』観世音菩薩普門品、『観音経』などによる観音菩薩の独立の像が造られ、かの有名な飛鳥時代の救世観音像(左記の吉川館長の記事、図)は聖徳太子等身大の観音菩薩像です。

飛鳥時代後半(645~670年)から本像のような小金銅仏の像が流行し、宝冠正面につけられた化仏が(聖)観音菩薩の印しです。本像は宝髻を包む頭布状のものや頭髪、天衣、裙などに細かい表現や襷を施さず、概して各々が一つの大きな面として構成されているのが特徴です。四角張った顔の目鼻も簡単な造りですが、口角や鼻下、唇下の溝などに写実的な点が見られるのも時代的な特徴です。側面観では面奥が極めて深く、鼻や唇は極めて小造りであり、胸や突き出した腹部の厚みも充分で、童子のような愛らしい姿を見せています。台座は本体と一鑄の八葉蓮華の請花部のみ同時期のものです。

この時期の観音菩薩の小金銅仏には四十八体仏中の辛亥年(651年)の銘を刻んだものを始めとして個人の追善供養の為に作られたものが多いようです。本像の裙の背面に簡単な針書で「散位荒木長次靈代」と読める銘が刻まれています。これは後世(中世頃まで)の所有者によるものと考えられます。実は本像は、その後も、当館に入るまで個人の念持仏であったのです。念持仏としては仏性としても慈悲に溢れた観音菩薩の愛らしい小金銅仏が最も人々の心に受け入れられたことが良く分かります。

(村田靖子)



金銅如来坐像(正面) 北魏時代



同左(背面)

季刊 美のたより No.120

平成9年8月21日

発行 大和文華館